

「ラーマクリシュナの福音」勉強会 第21回 (2015年9月15日)

- ・(前回からのつづき) 勉強の前のマントラについての説明

(マントラ)

Tava Kathāmṛtaṁ tapta jīvanam
Kavibhīṛitaṁ Kalmaṣāpahaṁ
Śravaṇa mangalaṁ Śrīmadātataṁ
Bhuvi grṇantiye bhūrida janāh

(サンスクリット語の読みかた)

タヴァカタームリタム タプタジーヴァナム
コヴィビリーディタム カルマシャーパナム
シュラヴァナマンガラム シュリーマダータタム
ブヴィグルナントウイエ ブーリダージャーナーハ

(説明)

(1) タヴァカタームリタム

- ・タヴァ「あなたの」・・・あなたとはどなた? 神様です。
- ・カター「教え、話、会話、言葉」
- ・アームリタム「甘露」「不死の飲み物」「不死」

意味は、「神様(ここではシュリー・ラーマクリシュナのことです)、あなたの話、あなたの教え、あなたの会話は、とてもとても素晴らしい甘露(不死の飲み物)です」

どうして「カター(言葉)」が「アームリタム(不死)」になるのか?

意味は言葉を聞いて永遠になる。つまり霊的なレベルで永遠になるという意味です。言葉を聞いて、今まで気づかなかった内なる自己、自分の本性(魂)に気づくという意味です。

悟りとは「自分と自分の本性が合一する」ということ。

無知とは「自分を体や心などと同一視している(=ムリタ)」ということ。

無知を取り除けば、自分と自分の本性を同一し、最終的に合一します。自分の本性以外、自分の別の存在はなくなり、自我もなくなります。

自我は、内なる自己と、粗大な体・精妙な体の真ん中にあるのです。

自我が、みずからを粗大な体・精妙な体と同一しているとき、それを無知といい、同じ自我が、内なる自己、すなわち自分の本性であるアートマンと同一しているときがアームリタ。永遠。不死。すると永遠の知識を得ます。(☞第19回福音勉強会も参照)

自我は原因の体とも言います。

何の原因か? 粗大な体、精妙な体の原因だということ。

いま説明したことをよく考えてみてください、無知の源は自我ではないですか?

そして自我も、体や心と同じように永遠ではありません。それはとても精妙ですが物質です。それを忘れていた状態が無知です。

無知の反対は何ですか？ **識別**です。

識別にはふたつの方法があります。

- ①「私は体ではない」「私は心ではない」という識別
- ②「私は内なる自己である」という識別（知識の瞑想）

悟りとは識別した理解が**安定**しているということ。

「私はアートマンである」「アートマンは不死であるから私も不死である」そういった理解から1秒も離れないということです。

カタ（言葉）を聞くだけではアームリタ（不死）にはなりません。

どうしたらアームリタになるか。

カタを聞いて、何回も聞いて、識別して、実践して、放棄して、抑制して、最終的に体意識がなくなってアートマン意識が安定すると、ついにアームリタになります。悟ります。

ですが源は言葉です。アームリタのプロセスの源は『福音』の言葉、イエスの言葉、お釈迦様の言葉、みなアームリタです。みな真理です。

勉強の本当の意味は「読む、理解する、思い出す、実践する」の総合でしたね。

『福音』の勉強も同じです。『福音』に出てくる物語が好きなだけの人もいます。読むだけで実践しない人もいます。ですがそれでは不死にはなりません。

たった一回聞いただけで理解はできません。また理解には浅い理解と深い理解があります。だから何回も何回も読んで深く理解してください。

私自身、何回も読んで、やっとあることに気づくことがあります。

また自分の長年の疑問にある日『福音』の中に答えがあることに気づくこともあります。

その疑問というのは「ひとの中に神様はいる。だがどうして見えないのだろうか」というものでした。そして答えは『福音』のタクールの言葉の中にあつたのです。

ひとの中の神様を、いつ見ることができるのか？ それは心が純粹になったとき、というものでした。実践して純粹になって自分の中に神様を見ないと、ひとの中の神様は見れない。神様がいても、見えません。

何回も読み、深く理解し、実践をする。

そこまですれば「カタ」が「アームリタ」になります。

疑問や質問が出るほど言葉に集中して読んでください。一度にたくさん読まなくてもよい。少しずつ集中して読むと深く理解できます。

（2）タプタジーヴァナム

- ・タプタ「とても熱があつい。高熱で焼かれるような」
- ・ジーヴァナム「人生、命、生活」

ふつう、人生には苦しみ・悲しみがたくさんある。それを「熱」と表しています。

（3）コヴィビリーディタム

- ・コヴィ「賢い人」
- ・イーディタム「ほめる」

「コヴィ」の一般的意味は「詩人」、ここでの意味は「賢い人」「聖者」「賢者」です。

意味は、「聖者たちはそれをほめます」。

ふつうのひとがほめるのと聖者たちがほめるのでは、ほめる見方がまったく違います。ふつうの人は体という粗大な部分だけを見て相手の印象をつくります。もう少し深く考える人は心がきれいかを見て印象をつくります。霊的なひと、聖者のひとたちは、その人の霊的なレベルはどうか？ そこまで見てその人の印象をつくります。そうした聖者たちがほめたのがシュリー・ラーマクリシュナの言葉です。(☞第20回福音勉強会も参照)

(4) カルマシャーパハム

- ・カルマシャ 「罪」
- ・アパハム 「取り除く」

意味は「罪を取り除く」。

ときどきわれわれは犯した罪を後悔しつづけます。罪への後悔がいつも潜在意識の中にあって、それがストレスになっています。

「カルマシャーパハム」とはそれがあっても、「神様のことを聞けば罪は取り除かれる」という意味なのです。神様のことを聞いて祈れば、前世の罪も含めたすべての「カルマシャ」がなくなります。その信仰が大事です。

ベンガル語の美しい詩

カパレジャーチェマー
タイジョディハヴェー
ドウルガドウルガボレ
アトゥダカヌガトウハヴェ

(マザー、私の運命を変えてくれないと、私の『ドウルガー、ドウルガー』という祈りが無駄になります)

「カパレ」は運命です。

カルマの法則は運命のようですね。悪いカルマ(行い)は絶対に自分で刈り取らなければならない、という。

ですがシュリー・ラーマクリシュナは、ある意味ではカルマの法則を信じていませんでした。もちろんその法則は存在していますが、しかしもし神様に真剣に祈れば、法則(運命)は絶対に変えることができると信じていました。

ひとつの意見としては、運命は絶対に経験しないといけない、というもの。

シュリー・ラーマクリシュナの意見は、運命は絶対に変えることができる、というもの。

マザー・ドウルガーの恩寵で、大きな障害が小さくなったり、なくなったりします。

ベナレスのラーマクリシュナのアシュラムは、病院とお寺、ふたつありますが、そのお寺の長はチャンドラ・マハーラージといいました。

その時アドブターナンダジが近くに住んでいて、ある弟子がチャンドラ・マハーラージのところに行ってからアドブターナンダジを訪ねました。アドブターナンダジは「チャンドラ・マハーラージは何と書いていましたか？」と聞きました。その者は「チャンドラ・マハーラージはカルマの結果は経験しないといけないとおっしゃいました」と答えました。アドブターナンダジは言いました、「そうではない。カルマの結果は絶対に変えることができます」。

直弟子たちをシュリー・ラーマクリシュナがトレーニングしましたから。タクールはある意味ではカルマの法則は信じていなかったのです。これはMさんも本の中でそう証言しています。

(5) シュラヴァナマンガラム

- ・シュラヴァナ「聞く」
- ・マンガラム「善、良い、幸福 (welfare, wellbeing)」

耳の感覚はサンスクリット語で「シュラヴァナ・インドリヤ」。合わせて読むと「シュラヴァネーンドリヤ」。「インドリヤ(Indriya)」は感覚。目の感覚なら「チャクシュ(cakshu)・インドリヤ」。

「シュラヴァナマンガラム」の意味は「聞くと善(良い結果)が出ます」。ふつうのことは聞いても何も結果は出ない。しかし『ラーマクリシュナの福音』を読むと良い結果が出ます。聖典もそれについて言及しています。

『バガヴァッド・ギーター』 第18章 71節

反感を抱くことなく、この対話を素直に聞いて信じる人も、もろもろの悪業報から解放され、善人たちの住む吉祥明樂の世界へと入ることであろう。

(サンスクリット語)

シュラッターヴァーン アナシュリヤースチャ シュリヌヤード アピョーナラハ
ソープムクタハ シュバーンローカーン プラープヌヤート プンニャカルマナム

「シュリヌ」は「聞く」。しかしどのように？
「アナシュ」、尊敬を持って。

ときどきありませんか？ 学校で、学生は聞きたくない、興味がない。しかし聞かないといけません。尊敬がない。それでは結果は出ません。

アナシュ(尊敬)は、言うこと聞くことにおける尊敬です。昔インドのほとんどの人は学校に行っていなかったから字が読めませんでした。そこで宗教のプロフェッショナルな説教師から「聞く」というアイデアが一般的だったのです。

尊敬に4つ種類があります。

- ・神様への尊敬
- ・聖典への尊敬
- ・先生(グル)への尊敬
- ・自分への尊敬(=自信。自信がないと何もできません)。

タクールの言葉

「ボラルチェシュナルダゴ シュナルチェダカルダゴ」
(聞くは読むよりもっといい。見るは聞くよりもっといい)

チャイタンニャ・デーヴァはベンガルに生まれて南インドを旅していました。ある時ひとりの人がバガヴァッド・ギーターを読みあげ、それを近くで聞いていた人が泣い

ていました。チャイタンニャ・デーヴァは聞きました、「何かを理解したのですか?!」。その人は「いいえ、私は何も理解していません。ただ私は話を聞いて、(とても強く想像して) 見ているのです」「何を?」「馬車の上にアルジュナが座っています。アルジュナに神様が教えています。私は神を見て、シュリー・クリシュナを見て泣いているのです」。哲学のことは何にもわからなくてもその人は、ただ聞くだけで神様のイメージがいきいきと現れています。

「シュラヴァナマンガラム」とはそうした態度で聖典や福音を聞くと結果は大きいということです。

尊敬がなければ、どんなに聞いても何も結果は出ません。ときどきいます、神様についてたくさん聞いているけれども結果が出ていない。なぜなら尊敬して聞いていないからです。

尊敬の本当の意味は、本当に、「そのことは正しい」「私のために大事」「可能な限り実践する」という意味です。ただ聖典にタッチしてプラナムだけ、ではない。

このように尊敬をもって聞けば、それだけでも良い結果が出ます。良い結果とは、「純粋になる」「神聖になる」「何が真理で何が無知か、聞けばわかるようになる」。ですから「尊敬をもって聞く」はとても大事です。

聖典を理解するにはその深い意味まで理解しなければならない。ですがその理解に到達するには自分が純粋にならなければ、そして真理のことを集中して考えなければ勉強してもわからない。

講和会や勉強会で一生懸命言っても、集中して理解しようとしなければ、勉強のレベルは上がりません。ときどき何の目的で続けているのかとも思います。しかし、「聞いているのだからそれもいい」——これも答えです。どうしていい? 今はちょっとやる気がない。しかしやる気はあとで出てくる可能性がある。それは明日かも、来年かも、10年後かも、もしかしたら来世かもしれない。しかし絶対にあります。ギターも言っています。サットの楽しみは、最初は苦くてあとは甘い。ラジャスの楽しみは、最初は甘くて最終的に毒になる。だから来続けていれば、いつかは思い出す。思い出すからその時から気を付けます。

だから聞くだけであっても100%無駄とういことはない。

タクルのおもしろいたとえ

「菩提樹の種。鳥が食べます。食べると便が出ます。そこからやがて新しい植物が出ます」

いつ芽が出るかわからない。

ですから「ジャパをしています、なにも結果が出ないのでやめます」。そうではありません。絶対に結果は出ます。楽観主義(オブティミズム)で絶対に続けてください。

私も皆さんのやる気がバラバラでもOK私は続けます。続けられれば私も勉強できます。

だから「聞く」も大事です。
真理のことを聞けばいつか結果がでます。

今日は「シュラヴァナマンガラム」まで。

(『福音』勉強会第21回、以上)